

ますだ きさぶろう
増田 喜三郎

ボブ・ディランの ノーベル文学賞受賞に想うもの

●日本郵政グループ労働組合
(JP労組)・中央副執行委員長

昨年のノーベル文学賞が、シンガーソングライターのボブ・ディラン氏に与えられたことが話題になった。ミュージシャンとしては初となる栄誉に祝福の輪が広がる中、多くの作家からは、選考への批判も噴出。反戦や反体制といった強いメッセージ性の裏にある「文学性」の真価に注目が集まった。

ニューヨーク・タイムズは「ボブ・ディランはノーベル文学賞を必要としないが、文学はノーベル賞を必要としている。」と皮肉のきいたコラムを掲載。ニューズ・ウィークにも「文学とは静かに自分に向けて読むものだ。静寂と孤独は読書と不可分の関係にある。読書こそ文学に向かう唯一の道である。」との批評が載せられた。一方、賞賛のメッセージはオバマ大統領をはじめ多くの多様な人々から発せられているのも周知の事実である。

私も、ディランの影響を受けた多くの日本のミュージシャンの世代に育ち、音楽というよりは、そのジャンルを超えて、歌詞が偉大な文学として認められたことに嬉しく思う一人でもある。

代表曲「風に吹かれて」を今一度かみしめてみよう。今回は、私が一番ピッタリだと思う忌野清志郎の日本語訳で紹介したい。

どれだけ遠くまで歩けば、大人になれるの？
どれだけ金を払えば、満足できるの？
どれだけミサイルが飛んだら、戦争が終わるの？
その答えは風の中さ
風が知っているだけさ

.....

したがって
どれだけ風が吹いたら、解決できるの？
どれだけ人が死んだら、悲しくなくなるの？

どれだけ子供が飢えたら、何かが出来るの？
その答えは風の中さ
風が知っているだけさ

この歌詞(楽曲)に「文学性」があるのか無いのか、そんなことは私にはどうでもよく、自然と頭に中にメロディーが流れ、英語の歌詞の意味は十分に理解できていないにも関わらず、胸に熱いものがこみあげてくる。

そのようなことを想いめぐらせながらも、ふと、私たちの労働運動、社会運動に引き寄せて考えてみると、これまで多くの文章やアピールや訴えに出会ってきたことに気づかされる。

私たちは、様々な運動を通じて、幾度となくノーベル賞に匹敵する歴史的文書ともいべき文章・表現・主張に出会い、感銘し、共鳴し、伝導してきた。

そこで、特に自分史的に「文学的」なのかどうかは別にして、今日の自分に大きく関わってきた文書・表現等を列挙してみたい。

まずは「人の世に熱あれ／人間に光りあれ」と結ばれた「水平社宣言」(1922年)。

「兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渴仰者であり、実行者であった。ろう劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であったのだ。ケモノの皮はぐ報酬として、生々しき人間の皮をはぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代価として、暖かい人間の心臓を引き裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪われの夜の悪夢のうちにも、なお誇り得る人間の血は、涸れずにあつた。そうだ、そして吾々は、この血をうけて人間が神にか



わろうとする時代におうたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が来たのだ。」

次に、お隣、韓国の「4月革命」における「ソウル大学4.19宣言文」（1960年）。

「象牙の塔を蹴り破って街頭に出た我々は、疾風のごとき歴史の潮流に自身を参与せしめることによって、理性と真理、そして自由の大学精神を現実の惨憺たる痩せ土の上に注がんとするものである。良心は恥じることを知らない。孤独でもない。永遠の民主主義を死守する者たちは栄光のみを感じる。」

時代は現代に飛んできて、「連合評価委員会最終報告」（2003年）。

「労働とは何か、働くということは何を意味しているのかを、まず、平和や人間の尊厳、人類の幸福という高い理念から、視野を広くして歴史の文脈において見直すことから始めなければならない。」

「弱い者の連帯の組織である労働組合が担う労働運動の根本的使命は、社会の不条理に対して異議を申し立てることにある。不条理に対して闘う姿勢を持ち、行動することが労働組合という組織の使命なのである。」

最後に、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」前文（2015年）。

「我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解き放ち、地球を癒し安全にすることを決意している。」

「我々は、この共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う。」

「我々は、あらゆる形態及び側面において貧困と飢餓に終止符を打ち、すべての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境の下に、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保することを決意する。」

すべて言い尽くすことはできないが、心を震わされた一欠片である。

そこで考えさせられてしまうのは、さて、私は、このような心に響く訴えを組合員や多くの仲間たちに、発してきたのか、発することができてきたのか。まるっきり自信がない。幾度となく文章を書き、幾度となく講師と称して多くの人の前で話し、幾度となくアピールのあいさつを繰り返してきた。しかし、それぞれがどう受け止められているのか、はなはだ疑問の残るところだ。また一方で、私の「訴え」は時にして煽動的な一面があると批判され、「労働組合の指導部が、過度な期待感を煽ることは、時にしてミスリードとなる。」との忠告をよく受けてきた。しかし、私は思う。「期待感を抱かない労働運動になど誰が結集しえるのか！」と。

中島みゆきの「ファイト」では、「闘う君の唄を、闘わない奴等が笑うだろう」とある。吉田拓郎の「イメージの詩」では、「闘い続ける人の心を誰もが分かっているなら、闘い続ける人の心はあんなには燃えないだろう」ともある。

心に響く訴えが、誠実に今年こそ発せられるように精進していきたいものだ。